

## 【実践報告】

麻績村「森の学園」と「信大YOU遊未来」  
の協働による子どもと学生の成長

土井進・市川祥介

1. 現代の青少年に見られる人間関係の  
希薄化

長野県麻績村と信州大学教育学部の学生による地域貢献活動「信大YOU遊未来」麻績(2012)が、協働で青少年育成事業に取り組んで8年になる。この協働事業は、平成16年秋に市川祥介麻績村教育長(当時)が信州大学教育学部に1本の電話を寄せられたことから始まった。1村に1保育園・1小学校の麻績村の子どもたちに、幅広い人間関係を体験させるために、「信大YOU遊世間」(当時)<sup>1)</sup>の学生さんたちに村に来ていただけないか、という趣旨であった。即座に、学生の方こそ麻績村の皆様に学びたいので、よろしく願います、とお応えした。

現代社会における人間関係の希薄化という悩みは、麻績村に限ったことではない。総じて我が国の青少年は、小子化、過疎化、自動車社会による地域の遊び場の喪失等によって、年々人間関係が希薄化してきている(門脇1999)。平成生まれの現代の大学生にもこの傾向は顕著に見られる。食事も忘れるほど暗くなるまで思いっきり外で仲間と遊んだ、野良仕事の手伝いをしながらカエルやトンボを追い回した、子どもたちが集まって川で泳ぎ鮎を手づかみした、などという自然体験が子どもたちの生活から姿を消して半世紀になろうとしている(寺沢他2011)。子ども時代を勉強、勉強と受験勉強1本で育ってきたことによって、置き忘れてきた友情という宝物を取り戻すべく、信大生が立ちあがった。失わ

れた少年少女時代を追体験するために、「思いっきり子どもたちと遊びたい」と考えたのだ。学生たちは真剣に訴えた。「私たちは授業の単位が欲しくて子どもたちと関わるのではありませんから、絶対に授業科目化しないで下さい」と。このような青年期の自己形成への強い動機によって始まったのが「信大YOU遊サタデー」(平成6年6月6日)であった。大学紛争時代の学生たちの情熱にも負けない真摯な願いが、文部省(当時)にも届いた。「信大YOU遊サタデー」が一つのモデルとなって、平成9年度から全国の教員養成大学・学部でフレンドシップ事業<sup>2)</sup>(土井1997)が政策化された。

麻績村の子どもたちの成長を願う教育委員会の強い想いと、信大生が求める子どもとの心のふれあいがピタリと呼応して、平成17年度から学生が麻績村の活動に参画する両者の協働事業が始まった。これまでの8年間にわたる実践によって、子どもと学生にどのような変化や成長の姿がみられたのかを明らかにしたい。

## 2. 長野県「麻績村」の概要

麻績村は、信州大学教育学部のある長野市から約40km南、長野県のほぼ真ん中に位置し、山々に囲まれた田園風景が広がるのどかで小さな山村である。村の面積は34.38平方kmでその多くは山林原野である。自然保護を考えて、聖湖を中心とした一帯は観光・レジャー・別荘地として整備されている。JR篠ノ井線の聖高原駅や上信越高速道の麻績

ICも設置されている。また、国道403号が村中央を通っており交通の便に恵まれている。人口3,000余名（内小学生125名）、高齢化率40%以上、過疎化が進んでおり、数少ない若者たちはほとんど村外に通勤しているため、基幹産業である農業の担い手はほとんど高齢者である。

歴史的に見ると、遠く弥生時代から開けた麻績村は、交通の要衝として栄え、平安時代には東山道の支道として駅が置かれた。また伊勢神宮の麻績御厨が設けられていた。戦国時代は武田・上杉両軍の折衝地帯であったが、江戸時代には天領となり北国脇往還の麻績宿がおかれ、善光寺参拝客やお伊勢参りの旅人などの往来で賑わった。

明治8年（1875年）に麻績ほか4ヶ村が合併して麻績村となり、昭和31年に日向村と合併して現在に至っている。学校は、村立麻績小学校1校、隣村の筑北村との組合立筑北中学校が1校で、いずれも小規模校である。従来から村の姿勢として未来を担う子どもたちの教育には大変力を入れており、小中学校の校舎の耐震化を始め施設面での充実や、村費による学校図書館司書等職員を配置するなど、厳しい財政状況の中でも学校予算には特別な配慮がなされている。学校と地域との関わりは非常に深く、高齢者のボランティアグループや農業生産者などから、学校に対して様々な支援がなされている。

### 3. 学社融合施設「おみ図書館」の活動への「信大YOU遊世間」の参画

「おみ図書館」は、平成15・16年度に行われた麻績小学校の大規模改修工事にもない、小学校図書館と公民館図書館が合併されて誕生した。社会教育施設としての公民館図書館に児童館としての役割が加わり、「おみ図書館」は幼児から高齢者までの生涯学習推進へ

の大きな期待を背負って、平成17年度にスタートした。「おみ図書館」は、橋渡久美子司書が中心となり村民のボランティアからなる運営委員会によって活動が企画され、これまでに数多くの成果を上げてきた。学社融合施設を運営するモットーは、「みんなで作る図書館にしよう！」であった。主な取り組みは、書籍類の貸し出し、相談、絵本の読み聞かせ、講演会、そして、夏祭りやクリスマス会などのお話を中心としたイベントであった。これらの活動は、地域の高齢者の協力を得て行われている。

平成17年2月、大学2年生の大塚一哉と前崎全洋が麻績小学校体育館で行われた「たたきゴマ」作りの講座に参加した。子どもの頃よく「たたきゴマ」で遊んだという昔のガキ大将たちが、子ども時代の若々しい気持ちに立ち戻って、60年ぶりに復活させた昔遊びの体験学習であった。40名ほど集まった子どもたちも、2人の学生も真剣に教わり、重い鉈で桜などの木を削りながら自分のコマを削り上げた。自分の「たたきゴマ」を手にした子どもと学生は大喜びで、夢中になって体育館一杯に広がってはしゃいだ。この時の心境を大塚は次のように記述している。

「子どもたちは、初めて会う僕らに緊張していましたが、少しずつ打ち解けていきました。とても素直で元気のいい子たちだなあと思いました。もう一度この子たちに会いに来たいなあと思いました。すると、ある子どもが「かずにいい、また来てくれるよね？絶対また来てね」と言いました。僕はすぐに「うん」と答えました。あのときは本当にうれしかったです。僕たちに「絶対また来てね」と言ってくれる子どもたちの想いに応えたくて、僕はこのプラザをやりたいと思いました。僕にとってこの子たちの言葉がこのプラザをやる何よりの原動力であり、やる気につながり

ました。」(大塚2006)

このような子どもと学生の卒啄同時の出会いが原点となって、麻績村の社会教育事業に「信大YOU遊世間」の学生が参画することになった。この原点はそのまま教育の原点でもあるといえよう。

これまでの8年間にわたって活動を続けてきたプラザ長名と参加学生数、参加児童数は、表1.の通りである。

橋渡久美子司書は、学生の参画がこのように長期にわたって継続されるに至った要因を次のように分析している。「YOU遊という同じ団体が麻績村で活動しているのが、年度が改まってリーダーが変わるごとに運営方法やスタンスが変わってきた。これは、同じ活動が繰り返されるのではなく、新たな視点からの活動形態や内容の再構成であった。常に更新しつつ継続されることによって、マ

ンネリ化を脱し、1年ごとに変化、成長を遂げていく学生の姿を見てくることができた。」

橋渡司書の要因分析をうけて、市川祥介は「このことは、麻績村にとっては誠にありがたいことであり、このように継続してきたことが子育て支援事業をよりダイナミックに進展させてくれた要因の一つになっていることは、広く認められることであり感謝に耐えない」と高く評価している。

YOU遊の学生が麻績村に入ることによって、何が変わったのか。発足当初からずっと学生に関わってきた橋渡司書は、次のように捉えている。「3年目頃から麻績の子どもたちに変化が見えてきた。それとともに私たちは図書館の枠を越え、麻績の子どもたちの教育環境はこれでよいのかと本気で模索し、子どもたちが育まれる環境として「YOU遊世間」を村の社会教育活動に位置づけて考えるようになった。また、地域の特色を生かした活動にも「YOU遊世間」の皆さんに積極的に参加していただくようにした。それは、地域の方の活動に若い学生が入ることで、子どもたちにとって関心がなかった身近な地域の活動が、魅力的な活動へと大きく変化したからである。また、学生にとっても幾多の辛酸をなめて深い人生経験を積んでこられた地域の方々とはふれ合うことは、やがて教師となる上でメリットがたくさんあると考えたからである。

活動に当たっては、子どもたちの主体性を大切にしたい関わりを学生リーダーにもお願いした。大人によって全てお膳立てされた活動というのは、子どもたちにとって一体どうなんだろう、と強く疑問に感じるようになったからである。平成22年度までの6年間の積み重ねによって、村の子どもに関わる私たち大人の姿勢を変えていかなければならない、という危機感が生まれてきた。この危機感が

表1. 麻績村で活動した学生数と参加児童数

年度	プラザ長名	専攻・学年	学生数	児童数
17	大塚 一哉 前崎 全洋	理数・3 理数・3	21	50
18	永塚 達也 堀端 優也 名無恵美子	障害・3 実践・3 実践・3	37	100
19	旗持 貴優 小池 真弓 平野 結	理数・3 生活・3 障害・3	36	80
20	伊藤 香澄 吉池 潤奈	実践・3 実践・3	27	70
21	布山 朋和 田端隆太郎	実践・3 実践・3	33	80
22	小賀坂佳子 三石 梨沙	理数・3 理数・3	27	80
23	佐塚 大悟 藤橋 美月	生活・3 生活・3	52	60
24	成瀬 貴心 渡邊 玲菜	保体・3 芸術・3	35	63
合計			286	583

「子どもを自然の中へ」そして、「より主体的な活動へ」という関わり方に変化させていったと思う。この変化が「YOU遊世間」本来の精神である「やりたい人が、やりたいことを、やりたいようにやる」と合致するようになった。これが基盤となって7年目の「森の学園」構想につながっていったように思う。」

#### 4. 麻績村の生涯学習政策「森の学園」構想

平成22年1月に新たに就任した高野忠房村長は、若者が定住する麻績村を目指して全村的な重点施策として、「子育て支援事業」を打ち出した。その具体策として、子どもたちを大自然の中で思いきり遊ばせ、「生きる力」や「豊かな感性」を養う「森の学園」構想を提起した。「森の学園」の定義について、高野村長は村の内外に次のように説明している。「幼児期から多様な運動能力を開発したり、情操豊かな子どもを育てたりするために、保護者、学校、行政、住民が一体となって、恵まれた大自然を活用して行う屋外の実践学習である」と。

「森の学園」構想のもとに、「出生から就労まで子育てを一貫サポートする」政策を推進するために、従来の「おみっこ教室」を体験型の学びを重視する「おみっこ元気くらぶ」に改編し、放課後子ども教室の小松小百合社会教育指導員が担当者となった。麻績村の子どもたちを「おみっこ」と愛称で呼び、一人ひとりが「元気」に育つように、そして、子どもたちが思いきり遊び、楽しむことができる居場所となることを願って、「くらぶ」（倶楽部）と命名した。

「おみっこ元気くらぶ」の目標は、次の3箇条である。

① 村の自然を活用し、さまざまな交流と体

験型の学びを通じて、子どもたちが自ら考え協働して活動する事

② すべての子どもが自分の居場所を見つける事

③ 郷土愛を育てる事

次に「おみっこ元気くらぶ」の活動内容は、次の4つの体験型学びである。

① 高齢者ボランティアグループとの伝統的な遊びや大麦栽培を通しての通年事業

② 稲花作りやしめ飾り作りなどの村の伝承文化を学ぶ事業

③ ニュースポーツやキッズビクスなどの楽しみながらの体力づくりをする事業

④ 木工やマクラメなどの楽しい工作活動の事業

平成22年5月14日の「森の学園」開園式において、市川祥介は集まった子どもたちに次のように語りかけた。「皆さんおはようございます。今ここに、この森の学園・おみっこ元気クラブに参加された皆さんは、大変幸せです。なぜなら、学校では出来ないことが、いろいろ出来るのです。その中で、皆さんにとって、とても素晴らしいことが3つ起ります。何か分かるかな。おみっこ元気クラブで活動すると、まず、皆さんの頭の働きがとても良くなります。次に、皆さんの体が丈夫になって、運動がとても良くなるようになります。更に、皆さんは、今以上に麻績村が好きになり、心豊かな大変優しい子になります。でも、そのためには、どんなことでも、友達と仲良く、自分から進んで取組んでみてくださいね。

さて、こんな素晴らしい「森の学園」を考えて、皆さんと一緒に活動してくれるのは、誰でしょう。それは、教育長さん、館長さんはじめ、交流センターで仕事をされている方々です。そして、それをしっかり応援して下さっているのが、高野村長さんはじめ土井

進先生、皆さんが大好きな信州大学の学生の皆さんです。今日は35人もの大学生の皆さんが来てくださっていますよ。さらに昔の遊びの方々など地域の皆様方ですね。とてもありがたいことですね。それでは、早速、お友達と仲良く活動に取り組み、大いに楽しい一日にしましょう。」

## 5. 麻績村の子どもと信大生の成長

### (1) 私が小学校高学年のとき

現在、高校生のAさんはYOU遊との出会いを次のように振り返っている。

「YOU遊世間の活動が始まったのは、私が小学校高学年のときでした。初めての活動は昔遊びの「たたきゴマ」で、自分の隣に大きなお兄さんがいました。小学校に何故大きなお兄さんがいるのかと、最初不思議に思ったのを覚えています。それでもすぐに、優しく一緒に遊んでくれる皆さんが大好きになりました。その後も休日の図書館や体育館に集まって、いろんな遊びを企画してくれました。休日なのにたくさんの小学生が参加して、皆とっても楽しそうでした。

昔遊びの活動では、友だちや地域の方、YOU遊世間の方と一緒に遊べるのがとっても良かったと思います。そんな活動の中で、自分はわりと人見知りしないタイプなんだなと気づきました。中学生になってから初詣に行ったとき、偶然YOU遊世間の当時のリーダーの方に会いました。私が声をかけるとちゃんと覚えてくれていて、小学生のときと同じように笑顔で話をしてくれました。とっても懐かしくてうれしかったです。

私が小学生のときにYOU遊世間の活動が始まって良かったなと思っています。素敵な活動をありがとうございました。」

### (2) 子どもたちの「笑顔」に囲まれた教員になるために

麻績村での活動を大塚一哉とともに立ち上げた前崎全洋は、学生時代の麻績村でのYOU遊の活動を次のように振り返っている。

「私は今、愛知県の小学校で教員になって5年目になる。たった5年だが、実際の学校現場から学んだことはたくさんあり、未だに日々勉強の毎日で、教員という仕事に生きがいと楽しさを感じながら仕事に励んでいる。そんな私が本気で教員を目指し始めたのは、YOU遊世間を通して多くの子どもと出会い、多くの笑顔に触れ、多くの喜びを得られたからである。今でも学生時代に感じた子どもたちの輝いた笑顔の持つ力を追い求めて、いかにして笑顔の花をたくさん咲かせていくかが、私の学級経営や授業内容を考える基盤になっている。

麻績での様々な活動にかかわらせていただく中で、子どもたちのことを本気で考える多くの大人とも出会った。そして、子どもたちの笑顔を増やしていくためには必ず大人の手が必要で、地域と学校が協力して子どもたちをサポートしていくことが大切だと強く感じた。YOU遊世間がどれほど偉大な活動であるかは正直想像がつかないが、YOU遊世間での経験が今の私の基になっていることは間違いない。実際の学校現場で働いてみて、机上の勉強も大切だが、多くの子どもや大人とかわる中で大切なことを学んでいけるYOU遊世間のような「体験型の学び」はもっと大切であると感じている。」(前崎2012)

### (3) 「つながり」から生まれる子どもたちの「笑顔」

YOU遊の活動に2年次から3年間関わり、麻績村のプラザ長も務めた佐塚大悟(生活科学教育専攻4年)は、麻績村での活動の省察文に次のように記述している。

「正直で人懐っこくて、元気いっぱい…そんな麻績村の子どもたちと関わっていく中

で、自分が常に大事にしていきたいことに気付くことができました。それは、「つながり」から生まれる子どもたちの笑顔です。人と話して楽しいなと思うこと、人と協力して何か課題を乗り越えること、人を思いやりたり人の思いやりにふれたりすること、それらが子どもたちを笑顔にし、人ともっとつながりたいと思えるのだと、麻績での活動を通して感じました。その「つながり」が「誰かのために何かをしたい」と思える子どもを育てると考えます。私は、子どもたち同士をつなぐことが、子どもに身近な学生だからこそできることなのだと思います。またそれは、将来自分が、より子どものそばに寄り添える教師や親になっても変わらない信念であり続けます。」

#### (4) 若い年代層との関わりの意義

子どもたちは人・自然・文化との複合的な関わりの中で成長する。この中でも特に人格形成に大きく影響する人との関わりは、家族から始まって学校・地域の人々へと、成長とともに広がっていく。悲しいかな、麻績村では小規模なるが故に保育園から小学校卒業まで学級編成替えもなく、子どもたちの人間関係は、狭く固定的である。そのために、地域との関わりは、他地域より重要である。

幸いなことに麻績村の子どもたちは、多くの地域の方々に支えられて豊かな経験の場を与えられている。しかし、少子高齢化が進む麻績村にあって、関われる地域の方々も固定化傾向にあり、またその年齢層に偏りがあることは避けられない現実である。

このような背景の中で、子どもたちが日頃接することの少ない若い学生とふれ合うことができることは、大変意義深いものがある。しかも、その学生は次々と入れ替わり、より多くの人格とふれ合うことが可能となる。

学生は、若者の持つエネルギーと柔軟性を

併せ持っている。したがって、共に活動してきた村の職員や地域の人々は、異口同音に次のように述べている。

①行動力があり、情熱を持って取り組む。体力も続くので、子どもと共に行動し、労惜しみしない。②企画力があり、年齢的にも子どもに近い柔軟な発想ができる。反省や批判は真摯に受け止める。③ハンディを持った子どもへもチームワークで適切に対応し、楽しく活動できるようにしている。

麻績村の子どもたちの健全育成にとって、この若い学生との人格のふれ合いがどんなに重要な位置を占めていたか、今振り返りつつ、しみじみと感ずる。

#### (5) 「森の学園」構想にかける願い

幼児期から少年期にかけて、自然の中での体験活動がその後の人格形成に果たす役割の重大性については、いまさら述べるまでもない。ところが、自然に恵まれているはずの麻績村でも他の山村と同じように、産業構造の変化と過疎化、高齢化等により、山の手入れが行き届かず、山は荒れ熊などの出没もあり、気軽に遊べる山や野原が少なくなっている。さらに、少子化に加え交通事情もあり、子どもたちが学校の行き帰り道などに道草を食ったり、休日に近所の山林に入り込んで群れて遊んだりすることができにくい状態になっている。

このような背景を踏まえて、大勢の子どもたちが一同に会し、異年齢集団で生命の危険性のない程度の山林原野で、いろいろな自然体験活動を経験できる「森の学園」を構想したことは、大変重要な教育的意義を持っている。この活動においても、学生が共に参画してくれていることは、大変ありがたいことである。それは、若者の体力的なことはもちろんであるが、それに加え子どもに寄り添ったいろいろな発想が求められる中で、その発想

力の豊かさが「森の学園」としての活動の質を高めてくれているのである。これまた麻績村としては感謝に耐えないことであると同時に、このことは教職のOBの立場からみても、将来学生諸君が教壇に立つ日に必ず役立つことであると確信している。何故なら活動の体験から身につくいろいろな知識、技能もさることながら、学校でも見られない、家庭でも見られない、生（なま）の子どもを把握できるまたとないチャンスに恵まれているからである。

## 6. 子どもと学生の「今」、そして「将来」への証

「森の学園」と「信大YOU遊未来」が協働する中で、学生が子どもたちに会いたいと願う気持ちは、子どもたちが学生を待ち焦がれる気持ちと呼応している。「今度もお兄さんたち来てくれるの?」と異口同音に確かめたり、学生に会えることが確認できると活動への参加を決意したり、活動への取り組みに一層張り切る子どもたちの姿がそれである。

遊びせんとや 生まれけむ 戯れせんとや  
生まれけむ

遊ぶ子どもの声聞けば 我が身さえこそ  
揺るがるれ 『梁塵秘抄』

「森の学園」構想によって、村の子どもたちがお兄さんお姉さんと一緒に、無我夢中になって遊び、子どもの腹の底からの歓声が村に轟くようになった。また、お兄さんお姉さんと全力疾走で追いかっこする子どもの姿によって村に活気が戻ってきた。

子どもたちが、村内ではあまり見かけない社会人一步手前の学生の姿に憧れ、「将来」の自分を重ねている高学年の姿を見るとき、

子どもと学生の「今」のみならず、「将来」にも好影響をもたらす証となっているように思われてならない。

麻績村での通算8年間におよぶ「信大YOU遊世間・未来」の地域貢献に対して、心より敬意と感謝を申し上げる。今後さらに麻績村の子どものために、そして、実践的指導力に満ちた逞しい教員養成の実現のために、この協働事業が継続され一層の充実が図られることを切に希望する。

## 【注】

- 1) 「信大YOU遊世間 (World)」(2003)の前身は、「信大YOU遊サタデー」(1994)「信大YOU遊広場 (Plaza)」(2001)である。平成24年度から未来 (Chance)」と改称した。麻績村、青木村などの活動場所をプラザと呼んでいる。
- 2) 平成9年度から文部省が設けた「フレンドシップ事業」の骨子は、次の3点であった。①教員養成大学・学部において、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることができる機会を設定すること。②この趣旨の実現を内容とする授業科目を開設すること。③教育委員会や社会教育施設等の教育関係機関と連携・協力をはかること。この3点が満たされている取り組みに対して予算措置が講じられることになり、応募があった多数の大学から39大学に70,950千円(1大学平均、約180万円ほど)が配分された。

## 【文献】

- 門脇厚司 (1999) 『子どもの社会力』岩波新書  
 寺沢宏次・土井進ほか10名 (2011) 『体動かせ、人と関われ、頭使え』ほおずき書房  
 土井進編著 (1997) 『平成9年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 信州大学教育学部における地元教育機関と連携した「教育参加」の実践』信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター：p.114.  
 大塚一哉 (2006) 「発足の経緯」土井進編 『信大YOU遊世間』の教師教育学研究』信州大学教育学部：第12集,p.85.  
 前崎全洋 (2012) 「子どもたちの「笑顔」に囲まれた教員になるために」土井進編 『教員養成フレンドシップ事業「信大YOU遊」18年の教師教育学研究』信州大学教育学部：pp.91-92.

(受稿日 2012.11.8 掲載決定日 2012.12.4)

(どい・すすむ／信州大学教育学部)

(いちかわ・しょうすけ／麻績村教育委員会)